

「マスクして寝るほど寒き恐はき夜 池内友次郎」。今冬はインフルエンザが記録的に流行している。日本列島は恐らく、北も南も至る所でマスクの花盛りだろう▼「マスク」が冬の季語で、風邪予防の必需品だというのは、今季なら誰もが納得するはず。ただ普通の年は「春の季語でしょ」と答える人がかなり多いらしい▼俳句作家の權未知子さんが「季語、いただきます」(講談社)で書いている話だが、ご想像通り、花粉症患者が増えたからだ。春はマスクなしでの外出はつらい▼確かに昭和の歳時記で「花粉症」を掲載したものは少なく、春の季語に「杉の花」「杉花粉」が登場する。しかし花粉症を

越山若水

2018.2.17

詠んだ作品は見当たらない。「杉の花黄粉のごとく卓上に 阿部みどり女」▼ところが平成の歳時記になると、「杉の花」の副季語に「花粉症」と明記されている。「化粧して目なし口なし花粉症 近藤幸子」。明らかにマスク対策をした一句である▼スギ花粉症が社会現象化したのは1980年ごろから。今や患者は3千万人を超え「国民病」と呼ばれ、毎日の花粉情報、天気予報並みに重宝される▼日本気象協会の予想では、花粉前線はやがて北陸に到達し飛散量は昨年よりやや多いという。今年はいんフルエンザとスギ花粉のダブルパンチ。マスクは欠かせない。「いち早く身弱の故のマスク掛け 下田実花」